

はじめに

社会福祉法人みぬま福祉会の30年の節目に本を出すことになりました。

みぬま福祉会全体の力を集め本をつくろうと、刊行委員会には各部署の中堅職員や施設長が参加しました。刊行委員会は、歴史を発掘する作業やたくさんある事例の中からの絞り込みが必要であり、考えれば考えるほど困難をきわめました。執筆にあたったある施設長は、朝から鼻歌を歌うような普段の調子は影をひそめ、周囲から「どうかしちやったのか？」と心配されるような状態になっていました。毎月や毎年の実践のふり返しを行い、ある程度書くことには慣れていても、責任を持ってみぬまの歴史や実践に向き合う経験は貴重です。本づくりそのものがみんなの成長の場になったと実感しています。

*

刊行委員会と並行してつくった「第一部 みぬま福祉会の歩み」検討会には、開設当時のメンバーに加え、運動の節々に関わってきた母親たちが集まりました。そこでは、事実にもとづいて、みぬまの運動の節を確認し、節ごとの発展の原動力はなにかを考え、まとめることにしました。何よりも「みんなでふり返る」ことを大切にして、検討作業をすすめることにしました。あちこ

ちから資料を集め読み返すとともに、「みぬまの運動でみんなが大事にしてきたこと」のアンケートもとりました。

なんとか第一次案ができた2014年1月、「みぬまの歩み検討集会」を開きました。設立に関わった教員をはじめ職員・家族が80人くらい集まりました。

集会では、「誰一人不本意な在宅にしない」というみぬま福祉会の理念の背景には、就学できず在宅だった子の入学時の過酷な姿があり、だからこそ卒業後二度と在宅にしてはならないとする教員の思いがあったことを学びました。また補助金がない中で雇った職員の給料を保障しようとする学校では毎月カンパをよびかけ、校長先生を含め多くの教員が1万円単位で協力してくれたことなども話されました。職員の待遇を守ることは、現在に至るまでみぬま福祉会の運営の柱になっていますが、当時、設立の要になることを託され理事長になった鈴木敏勝さんは、「職員の待遇を県職員並みにするという提案が通らなかつたら、その役割を辞退しようと考えていた」という話が紹介されました。これらの話を聞いた職員の表情は引き締まりました。

「廃品回収、新聞集め、駅頭募金、バザーなどに日曜日の度に出かけた。厳しかったけど楽しかった」と、ふり返る話があり、「青春だったのかしら」という言葉にちよつと納得しました。母親たちは、活動や話し合いを通して仲間が広がっていく実感があり、つらいことがあっても、先生たちが一緒に活動に参加してくれたことでがんばれたと話しました。

親は職員のことをほめてくれます。また、こんなことを言ってくれたと、ずいぶん前のことをよく覚えていました。ある母親は帰省中に体調を崩し施設に戻る電話をしたら、「気をつけて戻っ

てきてください」と、職員に言われ、その後に「待ってますね」とつけ加えてくれたというようなことです。職員にとつてはそれを言うのは、あたりまえのことだと思っただけでも、こうして改めてほめられるとうれしいものです。こうしたやりとりがこの仕事には「大切なことなんだ」と思い、そのおもいを積み上げてきました。

若かった仲間も家族も教員も職員も30年分歳をとり、みぬま福祉会は今、世代交代の準備をすすめています。若い母親たちからは、励ましてくれた先輩の母親たちへ感謝の言葉が続きました。もう亡くなってしまった人も何人かいますが、大切にしていたわが子が、みんなと支えあいながら元気に暮らし働いていると確認し合うことのできた集会になりました。

全障研の品川文雄さんは、「みぬま福祉会はやさしく、しかもそのことが平等に保障されている」と言ってくれました。自分たちでは言いづらいことを的確に表現してくれたと思っています。一人ひとりを大切に、大切にされているという安心が主体的な努力の原動力になります。

*

第Ⅱ部の「みぬまの実践」は、刊行委員会が責任を持ち、5つの視点にまとめました。さらにみぬま福祉会のさまざまな局面に深く関わってくださった3人の共同研究者〃白石恵理子さん、峰島厚さん、中村尚子さんから、とりくみの到達点の評価とともに次の一步を指し示すコメントをいただきました。それぞれの章に共通して言えることは、職員だけの実践でなく、仲間や家族の主体的な関わりを含めて、育ち合う姿を大切にするのでした。

本のタイトル『みぬまのチカラ——ねがいと困難を宝に』は執筆が終わり、全体を読み通すな

かで決まりました。

みぬま福祉会は実践でも運動でも、「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切にしてきました。「つないだ手を離さない」姿勢は、人間のより良く生きたいというあたりまえのねがいを実現しようということと共通して、個や集団を発達させる力になります。

太陽の里の一泊旅行に行くとき、どうしても行く踏ん切りのつかない仲間を40分以上待っていたことがあります。時間通りに行くことを優先するのではなく、みんなで行けることに価値を見出していきます。一人を大切にすることでみんなに迷惑をかけていいのかというジレンマを克服し、一人を大切にすることがみんなを大切につながる、そういう確信があったからです。これは社会福祉の本質的な価値だと考えています。

*

ともあれ、全障研出版部からみぬま福祉会の本が出せることになりました。みんなできれいできたことがちよつとほめてもらえたようでうれしいです。叱咤し激励して出版まで支えてくれた全障研の品川文雄さん、蘭部英夫さんへ感謝の気持ちでいっぱいです。

この本が社会福祉にとりくむ多くの事業や福祉労働者を励まし、家族や障害のある人たちにつながり、孤立と利己を深める社会のあり方に影響を与えるものになればと願っています。

2014年6月

みぬま福祉会理事長 高橋 孝雄